

クラヴィコードについてのお話



【デザイン】 この小さなクラヴィコードのデザインは、17 世紀初頭にドイツで作られたと思われる作者不詳の楽器をもとにしています。オリジナルのものは一時期スエーデン王(King of Sweden)が所有していたといわれているので、それにちなんで私たちは KoS キットと呼んでいました。オリジナルはトリプルフレット(triple-fretted)だったので私たちの初期の KoS キットもトリプルフレットで設計されていました。しかしダブルフレット(double-fretted)のほうが使い勝手がよいので、数年前に全体を少し大きくして現在のダブルフレットのバージョンである「クラヴィコード」モデルに変更しました。今でもクラヴィコードと呼んでいますが、外観と音の改良のためにいくつかの点で設計を変えています。現在のバージョンは「クラヴィコード .2」です。パネルリッド式屋根蓋を採用、響棒の配置(soundboard barring)の変更、タンジェント(tangents)をよりヒストリカルなデザインに変更。更にオプションとしての白黒反転した鍵盤(reverse keyboards)、低音域での巻線(wound strings)、専用スタンドなども提供しています。

もしかしたら「トリプルフレット」とか「タンジェント」などの専門用語が出てきたのでとまどっていらっしゃるかもしれませんね。ちょっと後戻りして基礎的なお話から始めましょう。

【歴史】 クラヴィコードはハーブシコードと同じ時期、14 世紀の末頃から作られはじめました。この名前はラテン語の「鍵盤」と「弦」から合成されています。楽器自体は中世のオルガンの鍵盤と「モノコード」(響箱に一本の弦を張って動かせるブリッジをとりつけ、音程を確認したり歌手

のために基準音を提供したりするためのもの)とを合成して作られています。

【メカニズム】 構造としてはシンプルな楽器です。金属の弦が一端をチューニングピン(tuning pin)に、他の端はヒッチピン(hitch pin)との間にピンと(訳注:すみません、日本語にすると駄洒落になってしまいました)張ってあります。チューニングピンの側で弦はブリッジの上を通り、響板を通じて弦の振動を空気振動に変えます。ヒッチピンの近くにはフェルトの細い帯(リスティングクロス listing cloth)が弦の間に編みこまれており、演奏されていない弦が振動しないように、また演奏されている場合でも弦の使われない側の端の余計な振動を止めるようにしています。真鍮のタンジェントが鍵盤によって押し上げられて弦に当たると、その部分からブリッジまでが実際に弦が振動する長さとなり(この方式のために「フレッティッド」といわれます)同時に音を出すための振動エネルギーを伝えます。これは弦を振動させる方法としては決して効率のいいやり方ではありません。これこそがクラヴィコードがとても柔らかな音を出す理由です。

一方で、音を出すときはタンジェントが弦に接触したままなので音のダイナミックレベル(大小)をコントロールすることができます。鍵盤を押さえている間はずっとあなたがサウンドをコントロールできる、というのは他のどんな(弦をはった)鍵盤楽器でもできないことです。

初期のクラヴィコードはトリプルかクオドルプル(quadruple、四重の)フレットでした。つまり一セットの弦を3つ(または4つ)の鍵盤が共有していました(クラヴィコードはほとんど常に2本の弦を1セットとして作られていました)。ギターの場合でも、一本の弦に対していくつものフレットの場所によって多くの音程を演奏できるのと似ていますね。

17 世紀にはほとんどのクラヴィコードがトリブ

ルかダブルで作られており、18 世紀に入るときにはトリプルも作られなくなりました。

18 世紀中ごろには製作者達は各鍵盤 / 音程に対してすべて 1 セットずつの弦をもつアンフレッテッド(unfretted フレット無しの)クラヴィコードも作るようになりました。このタイプはクラヴィコードの人気の最も高まったドイツではブントフライ(bundfrei 開放された、フレットの無い)と呼ばれていました。各音に対して専用の弦(二本一組)を使うことによって、演奏上のフレキシビリティは高まりましたが弦の数が増えることによって楽器自体の幅が広くなり、弦の張力が強くなり、結果として全体にヘヴィーな作りにならざるを得ません。さらに、弦を張ってある全体の幅が広がるために、それぞれの鍵盤が長くなりサウンドのコントロールが難しくなっていました。こういった理由のために多くの演奏家は依然としてフレッティッドクラヴィコードを好みまし、製作者も小型のフレッティッド(gebunden)クラヴィコードも作り続けたのです。フレッティッドタイプのほうがより軽く作れるし、驚くほどストレートな(forthright)音を出すことができます。一般的に、この楽器のような小型のフレッティッドタイプのほうが、大きな音が出ます。一方で大型のほうは、響板が広がるのでより陰影に富んだ(complex)音が出せます。

【ショートオクターブ】 この楽器はショートオクターブ(short octave)を持っています。つまり、たった一個の鍵盤を増やすだけで低い方の音域を低いファ(low F)から低いド(low C)まで広げる方法のことです。この最低音の鍵盤は見かけ上低いミ(low E)に見えますが、さらに 3 度低いドの音に調律されます。下から二番目の鍵盤は見かけどおりファ(F)に、三番目は#ファ(F#)に見えますがレ(D)に、四番目は見かけどおりソ(G)。五番目は#ソ(G#)に見えますがミ(E)に。このようにして、いくつかのあまり使われない音をスキッ

プすることでたった一個鍵盤を増やすだけでレミファソラシを弾くことができるようになります。ショートオクターブに慣れるのはそんなに難しくはないですし、多くの演奏家は古い曲を演奏するためにこのやり方を好みます。実際に、このやり方でないと演奏できない曲もあります。でもあなたがどうしても気になるならば、通常の半音階に調律してもまったくかまいません。最低音はミ(E)でも、何でもお好きな音に調律されているのです。

【音量】 クラヴィコードの音が小さいことがハンディキャップだと感じる人が大勢います。もっとも、最初の印象は非常に静かな音しかしないように思われますが耳はすぐにこの楽器のダイナミックレンジに慣れてきて、強く弾くことでフォルティシモの印象を作ることができますし、また弱音はほとんど聞こえないレベルまで落すことができます。しかるべき音響環境さえ整えれば、数百人の聴衆を対象にしたクラヴィコードのリサイタルというのも十分可能です。また、オルガンやハープシコードに比べるとクラヴィコードは幅広いダイナミックレンジを持っています。一音一音の強度(intensity)は演奏者によってコントロールされます。指が鍵盤を通じて弦に密着している所以他の鍵盤楽器より以上に音色をコントロールすることができます。一番重要な要素はヴィブラート(ドイツ語で Bebung/ベープンク)でしょう。鍵盤を強く押し下げることによって音程が少し上がり、押す力を弱めると下がります。ついやりすぎてしまうくらいはありますが、音楽的には有用で効果的です。上手な演奏家にかかると音がたちあがりの後に膨らむ(swell)ような印象を作り出すことさえできます。対位法を使った作品の場合、特定の旋律を際立たせて強調することができます。もちろん、音を深くコントロールできる、ということは、コントロールしなければならないということを意味します。クラヴィコードの機構には自動的に動く部分はないので、ただ鍵盤を押し下げるだけでは必ずしもよい音がする

とは限らないのです。おずおずと演奏してはクラヴィコードはほとんど音を出してくれないでしょう。タンジェントはしっかりと弦に当たらねばならず、そのためには強い指と安定した手としっかりした演奏が必要です(strong fingers, a quiet hand, and clean playing)。もし鍵盤をいい加減に、または不確かにたたくとタンジェントは弦に当たって跳ねてしまい、「チャッキング chucking」といいますが、汚い音になります。鍵盤への圧力はまさにあなたが意図するように正確に、一音一音がゆるぎなく保たねばなりません。クラヴィコードは大胆に力強く演奏することもできます。あなたが指をコントロールすることを覚えてしまえばすばらしくクリアで表現に富み、かつ力強い演奏ができるようになるでしょう。

【音程】 鍵盤への圧力によって音程が変わるので、常に音程を意識しておく必要があります。ピアノやハーブシコードのように手の重みを鍵盤の上に乗せておくことはできません。十分な音を出すためにはタンジェントはある程度強く弦にあたる必要がありますが、いったん当たってしっかりと音が出てしまえばさらに鍵盤を押し下げて音程をひずませてしまうだけで、何の役にも立ちません(この楽器ではそれも難しいでしょうけれども)。

【トリル】 フレットの機構のために、特定の隣り合った二音を続けて演奏するためには前の音の鍵盤を完全に離さねばなりません。一見、隣り合った二つの鍵盤でのトリルは難しいか不可能にも思えるかもしれませんが少し練習するだけで完全に演奏できるようになるでしょう。また楽曲によっては、同じ弦を使う2音の最初の音を保ったままで二つ目の低いほうの音を演奏する指示があるかもしれません。これには簡単な対策があります。問題のある音を伸ばすのをやめ、あたかも演奏しているかのようにイメージするだけです。クラヴィコードの演奏というのはあなた個

人だけにかかわる活動です。あなたが特定の音を無視したり、この楽器の音域よりも低い低音を一オクターブ高く演奏したりしても誰も気にするわけではありません。もちろんあなたご自身も気にしないでしょ

【楽曲】 この楽器はハーブシコードのために書かれたほとんどの楽曲で新しい楽しみを与えてくれると思います。「フランス組曲」をクラヴィコードで弾くというのは、それをハーブシコードで演奏したり聞いたりするのは、どちらが良い悪いということではなく異次元の体験です。クラヴィコードがなぜベートーベンの時代まで多くの音楽家たちに愛好され、さらに近代のバロック楽器のリバイバルにあたっても再評価され続けたのか。さらになぜ多くの指導者たちがクラヴィコードを理想的な練習用の鍵盤楽器だと勧めてきたのかはすぐにわかっていただけたと思います。

【基準ピッチ】 あなたがバロック音楽に詳しいなら『クラヴィコードは「低いピッチ」、つまり「モダンピッチ」 $A = 440\text{ Hz}$ (ヘルツ、一秒間の振動数)よりも半音低い $A = 415\text{ Hz}$ にあわせたほうが良い音がする』との説を聞いたことがあるかもしれません。さらにモダンピッチよりも一全音低い $A=396\text{ Hz}$ のほうがもっといい音がする、ともいわれます。これは、特定のことに限って本当のことです。クラヴィコードは、**もともとその楽器が意図して設計されたピッチにあわせて調律されたときに一番いい音がします**。つまり、 415 Hz に設計された楽器は 440 Hz に調律するよりも 415 Hz にあわせた時のほうが良い音がします。これが先ほど触れた格言のもとになっているのではないのでしょうか。

このクラヴィコードは 440 Hz を基準に設計されているので、もしこの楽器を 415 Hz に下げて調律すると鍵盤のタッチが少しフニャフニャして(spongy)、音も少しはりのない音(a little bit

bland)になるかもしれません。クラヴィコードは歴史的に見るとさまざまな大きさとピッチで作られてきました。この時代には絶対音感（それが何を意味するにせよ）は知られていませんでした。また、ずっと後の時代になるまでクラヴィコードは歌や他の楽器といっしょに演奏されることはありませんでしたし、使われたとしてもごく稀でした。ピッチをどのレベルに合わせるのかは、哲学的な考察にもとづくというよりも楽器のサイズにあわせるという、単純に実理的な理由で決められたように思います。この楽器のように小型のものは、440 Hz か更にもっと高いピッチで使われたことさえ珍しくありません。ですから、「モダンピッチ」を基準にしているこの楽器を選ばれたからといってあなたが卑下されることは全くないのです。

（訳注：個々の音律の違いと調律の方法についてはマニュアルの後半で詳しく説明されます）

この節終了

【調律法 / temperament】 このクラヴィコードを調律するにあたってはなんらかの調律法を選ぶ必要があります。我々としては

四分中全音律(quarter comma meantone)
（16世紀以前から18世紀にいたっても一般に使われていた）

修正（循環）中全音律 (modified or revolving meantone) バッハの平均律クラヴィア曲集（訳注：一般に使われるこの日本語の曲名は間違いだとのことですが、世間一般に通用しているのであえてこの訳としました）で有名になった音律です。

の二つのどちらかを、ピッチレベルもタンジェントの再調整も不要なのでお勧めしますが、もしご希望であれば

平均律 (equal temperament)

を選ぶことも可能です。どの調律法を選ぶかは、今のうちに検討されておいたほうがよいでしょう。タンジェントの曲げ調整をいったんやってしまうと、その面倒なプロセスを最初からやりなおす覚悟をしない限り、特定の音律に縛られてしまうからです。